

心理臨床センター開設25周年を祝う

元札幌学院大学心理臨床センター客員研究員 池田光幸

心理臨床センター開設25周年、そして心理学部および大学院臨床心理学研究科の新札幌へのキャンパス移転を心からお祝いいたします。戦後まもなく産声を上げて以来着実な発展を重ねてきた札幌学院大学がまた一歩飛躍を遂げるものです。大学の変容の歴史は時々の社会状況に構成員が真摯に取り組んだ結果だと言えますが、今回の心理学部と臨床心理学研究科の移転はまた社会の心理的世界の混乱、混迷の深さに対応したものと言えましょう。幼児虐待、教育現場のいじめ、日々遭遇する耳目を驚かす事件の数々は眼を覆うばかりです。心理臨床センターはそのような諸問題が窺われ始めた頃、在学の心理系の諸先生方の強い要望の下に開設されました。先見の明というべきであります。開設されて間もなく心理の専門家としての臨床心理士の資格問題が全国的に大きくクローズアップされ、その養成のために多くの大学に臨床心理学の研究科が開設されました。そして2000年の札幌学院大学臨床心理学研究科の設置は道内開設の嚆矢となるものでした。心理臨床センターは臨床心理士養成のための必須の実施訓練施設として重要な役割を担ってきました。

小生の札幌学院大学との関わりはこの研究科の開設草創の頃のことですが、一時研究科や心理臨床センターの責任者であったこともあり、その活動の歩みやその後の展開には深い関心を抱き続けてきました。専門家を育てる立場として常に自らに問いかけていたものは、臨床心理士とは何か、どのような専門性を持てば良いのかということでした。最も基本的な答えは人を理解する専門家ということなのかもしれませんが、これは何も答えたことにはならないとも言えます。臨床心理士養成のカリキュラムは人の行動に関するさまざまな

理論や、性格、知能等を把握するための諸々の心理検査の習得を必須としていますが、これらを習得すれば本当に他者を理解できるのでしょうか。そもそも人が他者を理解するとはどのようなことなのでしょうか。人が他者を理解することなどそもそもできるのでしょうか。

知能など人のある一側面についてはその厳密な定義の下にかなり客観的な評価ができるのかもしれませんが。しかし性格だとか、態度だとか人の全体的性向を問題とし始めると途端にその定義も、ましてそれを評価することは非常に困難なこととなります。そもそもこのような人のある側面を評価しようとする時にはその根本的前提として、人の中には周りの世界からは影響を受けない、実体的なあるものが存在するという考えがあるのだと思います。この考えはデカルト以来近代の基礎となった理性、知性に対する絶大なる信頼感を出発としています。それはまたある意味で人を見るときの一定の歪み、偏りを作ってきたとも言えましょう。理性に対する過重な信頼は、人を知性の多少で価値づける傾向を生みます。人は置かれた状況によって、とくに他者との関係の違いによって見せるさまざまな姿を変えますが、知性のみの重視は人がこのような関係的な存在であることを忘れさせます。他者を理解しようとするとき、相手と自分はどのような関係の中にあって理解しようとしているのかについて十分な気配りが必要です。このような関係の重視は、ポストモダンの人間理解の基本として、心理学ばかりでなく多くの学問領域に影響を与えています。

ここに述べてきたことは何を意味するのでしょうか。それはやはり人間理解の深淵を語ってそこに完全さはないことを意味しているのだと思いま

す。人間理解の完全はないのです。とすれば人間理解を専門とする臨床心理士に求められるのは、今、目の前の人について理解したことは常に完全ではないという認識です。専門家として常により正確、完全な理解を求めて努力はしますが、時々得られるものは常に完全ではありえないのです。臨床心理士には謙虚さが必要です。今得られている知見に対する絶えざる振り返りが必須です。それは臨床場面、あるいは教育場面においては扱ったケースに対する多方面からの検討の重要性を語っています。私も現役の時にはそのような検討の場、すなわち教員や院生が合同で自由にケースについて討議する場「事例検討会」を大切にしてきました。心理臨床センターで関わったケースに対して、教員と院生が一堂に会して丁寧な検討を行う。それが臨床心理士の養成の原点ではないかと考えます。そこで人間理解の深みも幅も養われるものと思いますし、合わせて人を理解するに際しての謙虚さをも育てるものと思います。心理臨床センターのこのような伝統がますますその内実を豊かにし、発展していくことを願うものです。札幌学院大学を巣立つ卒業生が、目まぐるしく変化、複雑化していく社会状況にあって謙虚に、真摯に諸問題の解決に奮闘されることを強く願っております。